

# 友人の展覧会から

宮澤 知之

友人の展覧会に行った。彼の絵は極めて前衛的である。以前、彼は風景を描いていた。やがて抽象画を描き出したが、いま美術館の一室、片側の壁を占領した十数枚の絵は、一枚一枚全て画面中央に英単語をかけただけの巨大な二色刷の単語帳であった。色彩は印刷された如く鮮やかで美しかったが、私はこれが何を表現したものか疑い説明を求めた。

「人間の感性は個人個人みな現われ方は異なるが、その本には人間一般として普遍のものが存在する。それを描きたいのだが、ただそれは無意味で抽象度の高い絵のみが表現できる。」しかし色や単語を如何に無意味に配列しようとするかそれを選択した行為自体に意味がある。しかも具体性を拒絶しようとして言葉を描くとは。私は反問した「それなら何も描かないカンバスを掛けるだけでよいではないか。」返答「そういう画家もいる。だが何も描かないカンバスを掛けても材質や掛方や背

後の壁が具体性を与える。感性一般を表現する方法は他にあるはずだ。また自分は美術史の流れに組み込まれている。意味を排除するために言葉を描き、しかも十数枚も並べるのは、美術史を越えるための模索である。」

彼の話は逆説的であるけれども、要するに普遍性は個性を通じて表現されることを確認した上で両者の微妙な均衡を探求しているのだらう。だから本来有意の言葉を無秩序に並べることで無意味化するという方法をとったのだらう。このように私は解釈したが、ともかくも絵から何かを感得できなければ何もならないことは言うまでもない。私は努めて無心に絵を眺めた。だが卒直なところ何を感じているのかも分らなかつた。これは本当は私の感受性がにぶいためであらうが、友人は謙虚にも自分がまだ模索の段階だからという。

帰る際、私は最近発表した論文をさし出した。彼もまた友人である私の書いたものとはかく読んでくれるのである。今度は逆に質問された「このような些細なテーマはどういう必然で選ばれるのか。過去の事実の空白をうめることが目的なのか。」私は自分のテーマが些細なものとは思っていないが、これをどう説明してよいのか途方に暮れてしま

った。それは中国史を学んだことのない友人に対して説明しにくかつたからでなく、自分にとって十分納得できていない事柄だからである。中国史を勉強し始めたばかりのころ何故何百年も昔の外国のことを知る必要があるのか、よく自問し級友とも話をした。今は現代を知るには過去からの必然性を見なければならず、同時に研究史からの要請として個別のテーマが設定されると一応納得している。

にもかかわらず現代日本に生きることで外国の過去を調べることの間にかかる媒介を必要とすることがあまりに迂遠だという気が一方でするのである。

おそらく他人に端的に理解されないことは自分でもよく分っていないということなのであらう。友人も私も各々の領分でとにかく何かをめざして、それなりに前進したはずである。だが前進の度合に反比例して互いの理解はますます遠ざかった。これが長い目で見たら二歩前進のための一歩後退であればよいのだが、それには何より自己の確信を一層深めなければならぬことを改めて知ったのである。

(みやざわ ともゆき 文学部助手)